

女子高校生を対象とした友人関係についてのグループインタビューの ナラティブ・アイデンティティ分析

保坂 裕子

人間環境部門

Narrative identity analysis of interview on friendship with high school students

Yuko HOSAKA

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract: Previous studies have shown that friendship develops from childhood to adolescent. And a failure to advance to subsequent stage causes maladaptation to the school environment. Initially the friendship formation among elementary school students is based on the notion of “sameness”. As child mature, their focus gradually shifts toward friendships based on the notion of “difference” and respect for each other. This process of friendship formation has been seen to significant impact the development of identity.

In this paper, I focus on the significance of friendship for high school students and how they navigate their identity through “small stories”, the narrative on friendship. Through the interview held with the high school students, I noted how students modified their notion of friendship moved toward shared notion of friendship based on their exposure to the narrative of the others. In this process, they negate repeatedly other’s story. It can be considered that <negation> was one of the important strategy to claim their identity. Through the discussion, the students were able to gradually rich an understanding of each other’s view and in so doing were able to refine their identity with group.

Keywords: narrative identity, small story, peer group interview

はじめに

青年期の発達を考えると、友人関係は重要な要素として前提されている。家庭環境を離れた社会生活のなかで、家族とは異なる人間関係を形成することで身につけ発達する力は、その後の人生において重要な役割を果たすものと考えられており、近年話題とされることの多い「人間力」や「コミュニケーション能力」などもこういった人間関係のなかで身につけていくべきものであるとされている。したがって、友だちがたくさんいることはよいことであり、「人間力」や「コミュニケーション能力」といった社会生活を円滑に送るための力をもっていることの証とされる傾向にある。しかしその反面、友だちが少ない、友だちがいない、ということは、それだけでその個人が問題を抱えていたり、他の人とうまくやることができない問題のある人物であるとみなされてしまうこともある。つまり、友だちの有無やどのような友だちがいるのかということが個人の人格やアイデンティティにかかわるとさえ考えられている(土井, 2004; 2008)。このような傾向をみると友だちの存在は、自らの精神的安定にとってプラスである、あるいは切磋琢磨することで互いに高め合うためというよりは、友だちがたくさんいることをアピールすることが、自己の存在意義の主張とも取れると考えられるのではないだろうか。

そしてこういった傾向のなかで若者の友人関係は、広く浅くの付き合いが当然となり、その分、関係も希薄化しているとの指摘も多い。しかし浅野(2006)は、このような若者の友人関係の状況を悲観的にとらえるのではなく、時代による関係の変化とみている。インターネットをはじめとして、ひとつひとつがつながるツールは多様化しており、友人関係も多チャンネル化し、多様な人との出会いやつながりがうまれることで幅広い人間形成が期待できる。もちろんこれは、友人関係が希薄化しているとの指摘と表裏をなすものかもしれない。多くの友だちの存在は状況に応じて使い分けられており、そのことがその場、状況に応じた友人関係の形成そして多様化へとつながり、必然的にそのひとつひとつの関係は希薄になっているともとらえられる。またその時々で友だちを使い分けるといった行為自体が、人間関係を軽視していると受け取られてしまいかねない。しかしそれでも若者たちにとっては、そのような友人関係を維持するために、現在の状況や関係性について常

に慎重な判断が求められており、細心の注意を払う繊細さが必要とされる。いわゆる「空気を読む」という行為の連続のなかで、友人関係を維持しているのである。そうだとすれば、このような友人関係のメンテナンスに疲れてしまったり、あるいは対応しきれずにドロップ・アウトしてしまう若者がいても不思議ではない。そうだとすると、友だちは大切である、必要であるとしながらも、土井(2003)によれば6割を超える若者が友だちと距離を置いて付き合っているというの、理解できる。

友人関係といえば、発達におけるプラスのイメージを伴うものであったのは以前のことで、現代における友人関係は、友だちそのものの意味、役割が変化してきていると考えることができるのではないか。さまざまな顔を使い分け、気を使い、必死で空気を読むことで維持する友だちは果たして、若者にとってどのような意味をもっているのだろうか。ただ、自己アピールのためだけに必要としているわけではないだろう。従来の友人関係についての諸研究は、<関係>を扱っていながらも、友人関係を個人的なものにとらえ、その制度化された関係性の側面に目を向けてこなかった(アラン, 1989/1993)のであり、新たな友人関係研究への視点が必要とされている。

そこで本研究では、現代の若者にとって友人関係がどのように意味づけられているのかをとらえることによって、友人関係の制度化された社会・文化的背景を明らかにするとともに、その友人関係についての意味づけを背景にした彼/彼女らのアイデンティティ・クレームを探ることを目的とする。

まずは、友人関係がこれまでどのようにとらえられてきたのかについて、検討してみたい。

友人関係の発達的变化

友人関係の発達的变化については、保坂・岡村(1986)が心理臨床的知見に基づき三つの段階を提唱した。小学校中学年から高学年ごろからは外面的な同一行動による一体感(凝集性)を特徴としており、仲間集団を作り始める時期である。この時期の「友だち」は、「一緒に遊んだりするひと」と捉えられており、一緒に何かをすることが重視される。そしてこのような集団を、「ギャング・グループ」と位置づけている。中学生ごろになると、一緒に何かをするのみではなく、内面的な類似性が重視されるようになってくる。同じものを好きであること(あるいは

嫌いであること)などの内面的要因が基盤となり、互いにそれを確認しながら「チャム・グループ」を作る。そして次第に、ただ同じであることによってグループを作るのではなく、そういったグループにおける関係を通して形成してきた自己、互いの違いを認め合い、尊重しあう関係へと変化していく。高校生の時期以降に見られるこのような傾向は、「ピア・グループ」として分類されている。たとえば榎本(2003)は、中学生と高校生を対象とした質問紙調査を行い、同一性が重視される中学までとは異なり、高校生以降になると、互いの価値観や理想、将来の生き方などを語り合うなかで、次第に互いの違いを尊重しあう関係へと変化するのであり、中学生においてはみられなかった互いの違いを認め合い、尊重しあう「相互尊重欲求」が高まることを見出した。こうして、友人関係の発達とともに、自己の成熟と他者との関係の発達が見られると考えられてきたのである。

また、女子中学生および高校生の友人関係のスタイルと適応について検討した石本ら(2009)は、中学生において同調性の高い友人関係をとるものは適応的であったのに対して、高校生においては不適応の傾向が示されたことに基づき、学校段階ごとの友人関係の変化が見出されたこと、また関係を変化させていくことが適応につながることを示唆している。

しかし、時代や社会状況の変化に伴って、そのような友人関係のあり方自体が変化してきているとする指摘もある。たとえば保坂(2010)は、社会環境の変化に伴い、友だちとグループを作って放課後や休日に遊ぶ機会が減ったことにより、「ギャング・グループ」の形成が見られず、同調性を重視する「チャム・グループ」から友人関係の形成がはじまる場合が増えてきており、さらにはこの「チャム・グループ」は長期化傾向にあるという。また、大学入学前に仲間関係の十分な経験を経していないことが、大学不適応者増加の背景にあることも指摘されており(保坂・岡村, 1992)、友人関係の経験やその変遷がその後の社会への適応と深いかわりを持つ可能性がある。

子どもたちのかかわりを持つ「社会」が、学校を中心としたものから、塾や習い事、その他さまざまな社会活動にいたるまで多様化しており、その時々状況に応じた友だち作りが必然となっているともいえる。このような状況がそもそも、長期にわたる深い関係の形成には適さず、さまざまな「キャラ」の使い分けができることを友だち作りの前提として

いるのではないかと考えられる。キャラとは、マンガを描く際の手法の一つであったが、次第に日常生活のなかでも用いられることとなった。しかし、役割とは異なり、よりローカルで流動的なものである。キャラは、自発的に「演ずる」というより、コミュニケーション空間のなかで「自認させられ」「演じさせられる」ものであるとされる(瀬沼, 2007)。友人関係におけるキャラの受容と心理的適応について、中学生と大学生を対象に調査を行った千島・村上(2016)によると、中学生においてキャラの受容は容易ではなく、友人関係のなかで与えられたキャラを演じることによる心理的不適応が指摘されている。それに対して大学生においては、キャラを受容することが肯定的に評価されており、キャラを持つことで居場所を得ることができていると考えられている。つまり大学生になると、友人関係の中であるキャラを演じ分けることで、適応しているのである。ここでも、中学生とそれ以降(大学生)における友人関係の意味づけや自己の位置づけが異なることが示された。また難波(2005)は、社会関係がより複雑・多様化する青年期後期の若者にとっては、「友人関係」の多様性が前提されるとして、大学生・短大生・専門学校生を対象とした「仲間」との関係について半構造化面接を行い、「友人関係」の内容の多様さを示すとともに、児童期や青年期前期・中期の仲間関係と後期青年期は区別して認識されていることを確認した。

浅野(2013)は、近年自分らしさをどのような場合でも一貫させるべきであるという規範意識は弱まり、自分を意識的に使い分けることで多元的自己としてのアイデンティティが形成されていると指摘している。そうだとすると、発達段階を考慮する必要はあるが、いつも変わらない強固な自己を形成するよりも、関係如何に応じて自らのポジションを変更し、使い分けができるかということがむしろ、現代における友人関係を円滑にする上で適しているとも考えられ、アイデンティティの形成・発達とも深くかかわっていると考えられる。

以上のように、発達過程において重要な関係であり、社会状況の変化に伴ってかわりつつある友人関係について、中学生の時期から大学生の時期への、友人関係の過渡期である高校生に着目し、彼/彼女らによって、友人関係がどのように意味づけられているのかを探り、その友たちの意味づけと自らのアイデンティティにどのような関連が見出されるのか

について、高校生を対象として行ったグループインタビューの発話データから彼女らのナラティブをもとに考察を試みる。

本研究では、身近な他者との関係に見られるポジショニングの観点から検討ができるように、学校での友だち数人に対するグループインタビューの手法を採用した。グループインタビューは、発話の行われている〈いま〉を共有する者同士が互いにその違いや同じところを確認、また交渉することができ、個別でのインタビューとは異なり、グループの特性を活かすことで、より日常生活に近づくことができる(Flick, 1995/2002)。また、ここで着目するナラティブは、個々の内面を映し出すというよりもむしろ、対話のなかで生成されるというのが共通見解となっている(Gubrim & Holstein, 2009)。したがって、友人関係のなかでのアイデンティティを探ろうとする本研究の目的から、友人グループをインタビュー調査の対象とすることが適当であると考えた。ここで着目するナラティブ・アイデンティティについては、次節において概観する。

ナラティブ・アイデンティティ

わたしたちは、自らの過去の出来事をそのとき、その場において想起し、なんらかの意味的つながりを持たせることで、自らの人生について物語の形式で意味づけることによって理解する(Bruner, 1986; 1990)。つまり、ストーリーを語ることは、語り手が単一の枠組みに時間や空間、個性の整合性をもたらすことを可能にし、またそのストーリーが聞き手を含めた社会・文化的文脈において了解可能とされる(あるいは、了解可能であると想定される)ストーリーの産物として、つまり他者との語りにおける自らのポジショニング(Davis & Harre, 1990)の産物としてアイデンティティを捉えることができる。ポジショニング(位置取り)は、とくにナラティブを通して検討される、実践に基づくアイデンティティへのアプローチとされている。したがって、語りの実践のなかで何が起きているのか、その背景に何があるのかを理解することは、語り手のアイデンティティ理解へとつながる。アイデンティティは、語りが生み出された社会文化的文脈を背景とした、語り手と聞き手との関係のなかで交渉されるのであり、そのプロセスにおいて〈わたし〉という意味や価値が実践されていく。このように、他者との語りの実践

のなかで、語り手たちのアイデンティティの主張の表れを見ることができる。

ナラティブへのアプローチは、語られたテキストそのものに着目するもの、またそのナラティブが基づくテーマに着目するもの、さらにナラティブが生成される文脈そのものに着目するものと大きく三つのタイプに分けられる(Bamberg, 2012a, b, c; および保坂, 2014 参照)。本研究では、語っている〈いま—ここ〉の文脈において、そのナラティブで語り手たちがなにを交渉し、協働生成しようとしているのか、あるいは為し得るのかに着目し、そこに見られるそれぞれのアイデンティティの主張に着目する。そしてそのような観点から検討されるナラティブ実践においては、その文脈を支配する大きなディスコースを探るというよりもむしろ、些細なストーリー(small story)を通して、それぞれのアイデンティティの主張が検証されていく。Small story は、「現在進行中の出来事、未来や仮定の出来事、共有されている、あるいはすでに周知の出来事を語ること、以前言ったことをほのめかすこと、語りを据え置くこと、また語るのを拒否することなど、会話の文脈において頻度が高く、目立つナラティブ行為の全域を捉える用語」(Georgaleopoulou, 2007)とされており、そこでアイデンティティが継続的に実践され、かつその実践が試みられる関与の場であると考えられ、語り手と聞き手との相互作用のなかで立ち現れてくる。そこで本論では、女子高校生が友だちと語りあう small story のなかで、いかに自らのアイデンティティを実践しようとしているのかに着目し、分析する。

研究方法

大阪府下の公立高校に通う高校 3 年生 4 名の女子友人グループを対象としたグループインタビューにおける発話データを分析の対象とした。調査対象者への依頼は高校教諭を介して行い、「友だちについて話を聞かせてほしい」と簡単な依頼内容のみを伝えてもらった。なお、友人グループの定義も必要であるが、ここでは依頼の形態から、当人たちが友だちであると認識しているグループを対象としているため、友人グループへのインタビューとすることに問題はないと考えられる。調査者は、対象者とは調査実施日が初対面であった。

□調査対象者：大阪府下の公立高校に通う3年生の女子友人グループ4名。名前は仮名である。

- ・ひろか（4名の中で一人だけ出身中学が異なる）
- ・たかこ（ひろか、さきとともに現在も3名は同じクラス）
- ・さき（ふみこと部活がおなじ）
- ・ふみこ（3名と出身中学が同じだが、現在一人だけクラスが異なる）

□調査実施場所：高校の教室

□調査時期：2015年12月

□調査時間：1時間半

□質問項目

- ・高校生になったときのこと（高校入学時）
- ・これまでの友だちとの違い（中学校や小学校、幼馴染などとのちがい）
- ・友だちでよかったと思った出来事
- ・友だちじゃない、と思った出来事
- ・ともだちという存在について

本インタビュー調査は、その場の会話の流れを重視し、語り手たちが自由に展開できるよう心がけたため、調査者からの質問は、質問項目を中心として、適時必要に応じた追加の質問を加えた。すべての発話は調査協力者に許可を得て、ICレコーダに録音し、トランスクリプトを作成した。発話を、ある一連の発話内容（エピソード）ごとに分類し、そこにみられる **small story** を分析の対象とした。ある出来事についての発話が重ねられるなかで、各々が発話を通して何を達成しようとしているのかに着目し、分析した。

結果と考察

グループインタビューでは自己紹介や互いの関係についてたずねたあと、友だちに関する質問を問いかけた。まずは「友だち」という存在が、彼女らにとってどのように意味づけられているのかを探るため、「違い」に着目してもらった。

なお、以下に示すインタビュー調査の発話データ（トランスクリプト）からの抜粋において、Iは調査者を示し、=の記号は、発話者の発言が重なった部分を示す。

抜粋1

I：…友達、高校になって初めてできた友達とかで、中学校の時の友達となんか違うとことかってある？

ふみこ：やっぱなんか、どんだけ仲良くても、どっちがどうとかはないけど、昔から知ってるっていうだけで、ある程度のなんか、信頼というか、そういうのはあるな—ってこの頃思った。

<中略>

I：関係の深さみたいなもの？

ふみこ：なんやろ。（間）なんかもう一応、どんなやつか、そんなに仲良くななくても知ってるから。そんなに、しゃべったこと、そんなに、ま、ちょっとだけしゃべったことあるくらいでも、安心感はあるというか。

<中略>

I：クラスの友達と、クラブの友達とは、なんかちょっとちやうってかんじ？

ふみこ：クラブのほうが、でっかい。

たかこ：濃い、濃いです。

ひろか：それもまたクラブによりけりやな

<中略>

たかこ：でもクラスにもそういう友達はいるっちゃいる。なんか、なんやろ、一緒にクラブやってきたってというのが =

ふみこ：=一緒にいた時間が長い。さっきのじゃないけど。
たかこ：よくかんがえたらよくわからへんよな。だからな
にってかんじ。

（笑）

ふみこにとって友だちとは、信頼できて、安心感が持てる人であり、昔から知っているなど、長い時間を一緒に過ごした人である。ただし、「どっちがどうということはない」と高校に入学後の友だちを目の前にしていることで配慮が示されている。

ここでは語り手であるふみこの友だちの意味づけが語られるが、クラスの友だちとクラブの友だちを比較してクラスよりもクラブのほうが過ごす時間が長く関係が異なると指摘したふみこに、たかこが同意を示す一方で、ひろかが「それもまたクラブによりけりやな」と、ふみこの意味づけを<否認>している。語り手の一人が作ろうとしている筋書きを否認することは、当人のポジションを示すもつとも有効な手法であろう。つまりは、たかこのクラブはふみこらのそれとは異なるため、深い関係を築いているわけではないと主張しようとしている。「違い」に着目して友人関係を考えていくなかでこのように互

いの意見をぶつけ合っていくと、次第に「よくわからへん」と自らの同意した意味づけが揺らぎはじめる。このように対話のなかで同意や否認を通して、それぞれに揺らぎがもたらされる。そのなかから、この場、この友人関係のなかで「友だち」が再定義され、各々が持つ「友だち」の意味づけが再構築されていくのであろう。

次に、高校に入学したことによる環境の変化に着目した。メンバーのなかでも、ひろかは一人数だけ別の中学校出身であり、知っている人がいなくて不安であったこと、自らは「人見知りでシャイ」であるため、入学当初、友だちができるのかどうかがとても不安であったと話しはじめた。

抜粋2

I: 中学校違うかったら緊張した?

ひろか: もう私めっちゃ人見知りで。

(笑)

ふみこ: どこがやねん!

ひろか: そんななんか同じ中学校の子も、あんな、仲いい子とかいなかったんで、最初は結構きつかった。

現在において友人関係にあるほかのメンバーからは、ひろかの「人見知り」や「シャイ」というポジショニングは同意しかねたようで、「なんでやねん」とすぐさま否認される。しかし、ひろか自身が主張するポジショニングは揺らぐことなく、高校入学当初のエピソードを話すことによって、自らがすぐに打ち解けて仲間に入ることができず、つらかったことに同意を促すように、校内で迷ったときに誰にも助けを求められなかったエピソードや、お弁当と一緒に食べようといえなかったエピソードなどが語られた。このように、対話のなかで否認されることもあるが、その否認に対して説得を試みることで、自らのポジショニングを正当なものとして主張することも可能であり、この場において語り手がどのように自らをポジショニングするのかは、常に挑戦を受け、維持をするといったようにメンテナンスが行われていることがわかる。

自らをなかなか打ち解けられないシャイなひと、としてポジショニングしようとするひろかはさらに、自らを「殻をかぶってしまったので、破ってもらえるのを待っているタイプ」と表現した。それに対して他のメンバーは、さらにそのポジショニングを別の観点から揺るがしていく。ひろかが、友だち

のはずの自分たちに対してもたしかに「殻をかぶって」おり、いまだその状態にあると発言した。ひろかは、この展開に驚き、思ってもいなかった挑戦を受けることとなる。

抜粋3

たかこ: で、いつやぶけんの?

ひろか: え?

たかこ: そのひとつと、

ひろか: え? その=

たかこ: =一人の相手に対して。どんくらいまでいったら=

ふみこ: =だってわたしらやぶれてへんねんで、まだ
(笑い)

ひろか: まじで?

たかこ: どこまで行ったら=

ひろか: =あ、え? もう、ぜんぜんやぶってるつもりなんですけど。やぶれてないかな?

ふみこ: なんか、たまにな。

たかこ: だって、「たーさま」ってよんでる。

ふみこ: それちゃうくない?

(笑い)

たかこ: なんか「さま」づけでよばれるんですよ、気持ち悪くないですか?

ひろか: 敬意をこめてる。敬意を込めて。敬意やねん。

「さま」づけの呼称に距離を感じるとするたかこから、まだひろかは殻のなかでいて、やぶってくれない、というクレームがなされると、ひろかはすでに殻をやぶっていると主張。「さま」をつけて呼ぶのは、敬意を抱いている証拠であり、ひろかにとっては「親しき仲にも礼儀あり」で、仲がよいからこそ、尊敬できるということは友人関係において大切なことであると説明した。したがって、ここにいるメンバーは自らにとって友だちであり、為された指摘は誤りであると強く主張した。ところがたかこにとって、またその他のメンバーにとっても、敬語で話すことや「さま」づけで呼ぶことは、人間関係において距離を感じることであったと語られる。

ここで興味深いのは、たかこの「なんか、『さま』づけでよばれるんですよ、気持ち悪くないですか?」という発話は、調査者に向けられている点である。それまでの発話は主に、友人グループのなかで友だちに対して行われていたが、「さま」づけで呼ばれることに対する自らの違和感への同意を調査者に求め

ることで、意見の正当性を高めようとしていたようにも感じられた。また、直接強く指摘を重ねないことで、険悪な衝突となることを避けているようにも見受けられた。ここでも、ポジショニングが否認され、さらにこの関係のなかでのポジショニングのやり直しが対話のプロセスで行われていることが示された。

さらに「殻が破れていない」と感じるほかのメンバーに、どのようなときにひろかとの距離を感じるのかについてたずねた。

抜粋4

I: どのときにフィルターを感じるの?殻を。

ふみか: なんかもまだ遠慮してるなーって＝

ひろか: 二してねーよ。

ふみか: ぜったいしてる。LINEの敬語になる頻度が。

ひろか: あ、それは、個人的な趣味。

ふみか: しゅみ?

さき: LINEはなる、よく。

ひろか: やんなー。敬語とため口、個人的になんですけど、敬語とため口が混ざる人が好きで。

(笑い)

ふみか: なんかも言う時にさ、なんかもうほんまにごめんやねんけど、みたいな。

たかこ: なんかもふつうにただの気一つかいーなん?

ひろか: うん、そうやと思う。

ふみか: あ、そんなん別に使わんでいいやん。(笑い)

ひろか: 気は使っちゃいます。それは、仲いいとかじゃなくて、一定の節度を守りたいっていう信念のもと生きてるので。

(笑い)

なんかそれは、まあ、親しき仲にもじゃないですけど。それが、一定の距離と思われてるのかも、ということもあります。

ふみか: うん。

ひろか: でも私は別にそれでもいいと思っていて。仲良くするとき、くだける時はくだけるし、でもお願いするときは、ちゃんとしたいなーとはいつも思って、ます。

たかこ: でもこっちからしたらさ、もってってかんじ。

ひろか: それは、そう、今日初めて知りました。そうだったんだって。

I: じゃ、その敬語とかでもなく、ズバッと来てくれるのが友達って感じ?

ふみか: いや別に。(笑い)

たかこ: おずかしいな、ともだちー。

友だちであるのに、「まだ遠慮している」と感じる可能性があるというふみかにとっては、友だちは遠慮のない関係と意味づけられているのであろう。そしてひろかも同様に、友だちの関係では遠慮しないものである、という意味づけを共有しているようで「してねーよ」とこれまでの口調とは少し異なり、距離の近さを示すような発言をしている。顔を付き合わせた会話においてはこのように、「ため口」での会話ができる関係であることが実践されたがしかし、SNSにおいて「敬語」を用いることに対してやはり、距離を感じてしまうとするふみかにたいして、それは互いの距離のとり方とは関係なく、「個人的な趣味」であると主張した。互いの関係とは関係なく、自らの生き方、自らのアイデンティティとしてそうありたいと考えての意図的な行動であったことが釈明される。しかし、そのような自分のこれまでの行為への意味づけが、別様に受け取られていたことをこの場で知り、周りからは距離をとっていると感じられており、「もっと」距離を縮めてほしいと思われていることをひろかは、はじめて知ることになった。とはいえ、敬語でなくため口でいいことを言う、ということのみが「友だち」であることの証や定義ではなく、友だちに対しては敬意をもっており、つまりは友だちとは、自分が敬意をもてる人、尊敬できるひと、と考えていることがわかった。このように語り手たちは、これらの **small stories** にみられたように、<いまーここ>にある関係のなかで自らのアイデンティティを実践し、挑戦を受け、すり合わせ、検証しているのである。

ひろかはインタビューの最後に再度、自らの友だちとの関係(距離)の理解に立ち戻り、メンバーが自らにとって大切な「友だち」であることを主張した。

抜粋5

ひろか: 仲いい友達は一、みんな、ちょっとは、なんかりスペクトの側面をめっちゃもってて

ふみか: あ!もう(インタビュー調査は)おわっちゃったけど、なにかしら、尊敬できるところがあるひとは＝

ひろか: 二惹かれるし、自分から近づいていきたいなっておもうし。だから、おこは別にそんなに仲いいと思ってなくても、こっちがついていく感はある

I: うーん

ふみか: このひとすげーってなる

I: だれかいる?

ひろか：あ、それは、この二人なんてほんまにリスペクト
たかこ：どこを？
ひろか：そういうのつながってるかもしれへん。たしかに
I：リスペクトね。

アイデンティティはこのように、その場の対話のなかでストーリーを通して意味づけられ、またそれが否認されたり、さらに語りを重ねていくなかで、交渉され、共通の認識とされていったり、といったように聞き手と協働で編みなおされていくものであると考えられる。

総合考察

本論では、グループでの友だちをめぐる *small story* を取り上げるなかで、互いの意味づけ（発話）を否認することによる位置取りと位置取り直し、さらには交渉と説得に着目した。否認を通して、互いに互いを位置づけ、位置づけなおしながら、友人関係のなかでアイデンティティが協働生成されるのであり、否認しあうことで互いの違いを理解し、相違を意味づけなおしていることがわかった。自らが自身に対して与えた「シャイ」という<キャラ>は、友だちによって否認され、自分たちと「距離をとっている者」、として位置づけなおされるが、改めてそれは誤解であることが主張される。このように日常の会話のなかで、常に互いを位置づけたり、位置づけなおしたりしながら、わたしはなにもののであるのか、という主張としてアイデンティティは実践されていく。

しかし先に見たような、発達段階による差異を考慮すると、高校生になっているからこそ、互いに否認し、それを立て直すという関係をもつことが可能であり、もしかすると中学生くらいの友人関係においては、同意や同調がその主な対話の方略であるかもしれない。そうだとすると、他者から与えられるキャラに対して、違和感を表明することができず、心理的な不適応に陥ることも考えられる。また、子どもたちを取り巻く社会環境の変化に伴って、友人関係における位置取り方も変化していることが想定され、多様な社会的環境を経験し、さまざまなキャラを使い分けている中学生にとってはもしかすると、さまざまなキャラをもつことが安定へとつながっていると考えられる。いずれにせよ、中学生から大学生にかけての友人関係の変化の様相を、さらに検

証していきたい。

高校生の友人関係を、中学生から大学生へと変化の過渡期と考えると、その差異がどこからあらわれるのかを検証することも可能になろう。また、友人関係のありようについては、性差も想定されることから、今後さらに、日常の友だちとの会話に見られるポジショニングの実践に着目していきたい。さらには、こういった対話のなかにどのような社会・文化的要因が影響しているのかについても検討が必要であろう。

心理学においてアイデンティティは、確立すべきものであり、自らは見えない（あるいは、気がつかない）ものであるため、尺度やテストで明らかにされるものとして扱われてきた。しかし、ここでみてきたように、アイデンティティを語り^{ナラティブ}による実践としてみることによって、語り手自らの社会・文化的役割期待や、他者との関係のなかでその都度、関係のなかで試行されているプロジェクトとして捉えることが可能となる。ここで分析を試みた高校生たちのように、日常の関係のなかで彼女たちは、自らのアイデンティティを試し、否認されることを通して再度試し、交渉しながら、その場、その関係におけるアイデンティティを実践しているのである。

参考・引用文献

- アラン,G.(1989/1993)『友情の社会学』世界思想社。
浅野智彦(2006)「若者の現在」浅野智彦(編)『検証・若者の変貌：失われた10年の後に』勁草書房
浅野智彦(2013)『『若者』とは誰か：アイデンティティの30年』河出書房新社。
Bamberg, M., De Fina, A. & Schiffrin, D. (2011) D Discourse and identity construction. In S.J. Schwartz et.al.(Eds.) *Handbook of identity theory and research*. Springer Science and Business Media.
Bamberg, M. (2012a) Why narrative? *Narrative Inquiry*, 22(1), 202-210.
Bamberg, M. (2012b) Narrative practice and identity navigation. In J. A. Holstein, & J.F. Gubrium, (Eds.) *Varieties of narrative analysis*. Los Angeles, CA: Sage.

- Bamberg, M. (2012c) Narrative analysis. In H. Cooper (Ed.) *APA Handbook of Research Methods in Psychology: Vol. 2. Research Designs: Quantitative, Qualitative, Neuropsychological, and Biological*. Washington, DC: APA Books.
- Bruner, J. (1986) *Actual minds, possible worlds*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bruner, J. (1990) *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 千島雄太・村上達也(2016)「友人関係における”キャラ”の受け止め方と心理的適応：中学生と大学生の比較」*教育心理学研究*, 62, 1-12.
- Davies, B., & Harre, R. (1990) Positioning: The discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 20(1), 43-63.
- 土井文博(2003)「友達関係と規範意識」友枝敏雄・鈴木譲(編)『現代高校生の規範意識』(九州大学出版会)
- 土井隆義(2004)『「個性」をあおられる子どもたち：親密界の変容を考える』岩波書店.
- 土井隆義(2008)『友だち地獄：「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房.
- 榎本淳子(2003)『青年期の友人関係の発達的变化：友人関係における活動・感情・欲求と適応』風間書房.
- Flick U. (1995) *Qualitative Forshung*. Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH. (フリック, U. (2002)『質的研究入門——<人間の科学>のための方法論』小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子(訳)春秋社.)
- Georgakopoulou, A. (2007) *Small stories, interaction and identities*. Amsterdam: John Benjamins.
- 保坂亨・岡村達也(1986)「キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討：ある事を通して」*心理臨床学研究*, 4, 15-26.
- 保坂亨・岡村達也(1992)「キャンパス・エンカウンター・グループの意義とその実践上の試案」*千葉大学教育学部研究紀要*, 40(1), 113-122.
- 保坂亨(2010)『いま、思春期を問い直す：グレーゾーンに立つ子どもたち』(東京大学出版会)
- 保坂裕子(2014)「ナラティブ研究の可能性を探るための一考察：<Who-are-you?>への応えとしての<わたし>の物語り」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』16, 1-10.
- 保坂裕子(2015)「大学生は自らが「大学生である」ことをどのように意味づけているのか：ピア・グループインタビューによるナラティブ・アイデンティティ分析の試み」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』
- 石本雄真・久川真帆・齋藤誠一・上長然・則定百合子・日瀨淳子・森口竜平(2009)「青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連」*発達心理学研究*, 20(2), 125-133.
- 難波久美子(2005)「青年にとって仲間とは何か：対人関係における位置づけと友達・親友との比較から」*発達心理学研究*, 16(3), 276-285.
- 瀬沼文彰(2007)『キャラ論』STUDIO CELLO.

謝辞

本研究におけるインタビュー調査にご協力いただいた大阪府立I高校の生徒のみなさんおよび研究協力者を募っていただいた山崎尚美教諭に感謝する。

(平成28年9月30日受付)